昭和５年頃からの小学生時代の思い出　後藤護

『共立百年史　思い出のままに』からの抜粋

（略）私の物心ついた頃の住宅は、草葺きの掘っ立て小屋で、アシの垣をめぐらし、家の隅には唐臼もあった。

昭和５年入学の時の服装は、絣の着物に股引でランドセル。２年生の時にようやく学生服を買ってもらう。雨具はマントを着用し、貧しい家庭では親の背広の古いのをマント代わりに着ていた人もいた。帽子はタカ帽といって、目と鼻、口を出した毛糸で編んだものを被った。

弁当はタクワン漬け、秋ともなればトウキビか塩ゆでのバレイショ、またはカボチャで、１クラスで３～４人は弁当を持たない児童もおり、当時の農家は経済的には厳しいものでした。

（略）当時の道路は両側に側溝を掘って土を盛った程度のもので、側溝はニワトコが生い茂り、わずかに道の中央に馬車の轍と馬の通ったところが草の生えていない程度で、雨降りは長靴を履かなければ濡れてしまう状態で、ところどころに馬車の轍の穴が開き、大変な悪路でした。その頃の道路の補修は、冬期間に関係者が常呂川から砂利を運搬して客土のように道路上に置き、春先にまた関係者だけ出て、砂利を撒布し、幹線道路は部落事業で行ったものです。

第１幹線の各号線の橋もだいたい10年ごとに架け替たもので、用材は富丘の村有林からナラ材を払い下げてもらい、蒔きつけ前に架け替えたそうです。

（略）通学も慣れてくると級友の安藤治男君、安達武君とともに下校し、春ともなれば堤防上をブラブラ歩きながら水たまりに蛙の卵を見つけたり、スッカンコを食べたり、登校時に母に新聞紙に塩を入れてもらい、イタドリ、ブドウの芽に塩をつけて食べながら帰ったもので、第１幹線ではトゲウオを捕ったり、夏ともなれば道路上にアオダイショウが長くなっており、見つけ次第棒きれでたたき殺したものでした。

ヘビがたくさんいて、室田さんの畑には木の株の上にとぐろを巻いて数多くいたもので、午後ともなればトノサマバッタが砂利道に尻を突っ込んで産卵しているというようなのどかなものでした。

この頃は、自転車もない時代でした。

翌昭和６年、運動会の夜、屋内運動場で初めて活動写真があり、初めて見る活動で、当時は弁士付きのチラチラで、フィルムは時々切れたものでしたが、珍しかったため文句を言う者もなく見ていたものでした。

この年の頃から自転車が見え始める。

また、野付牛・常呂間もこの頃からバスを運行し始めたようだ。

この年の秋に、治水工事用に架けられていた常呂川の木橋（老朽した穴だらけの橋でした）が11月の大雪で落ちてしまい、川東の人たちは不便になり、翌７年、10号に渡船場を設け、渡船守を置き、そこから学童は通学するようになりました。東の生徒は、堤外旧道を11号踏切まで来て、道々へ出たものです。渡船守は関係者でひと夏麦何俵で決めたようです。

学校帰りには、夏には11号踏切から堤外に出て桑の実、秋にはブドウ、晩秋にはサンナ

シ（注：エゾノコリンゴ）など果物は豊富で、家にたどり着く頃は夕方でした。サンナシは堤防を築く前の住宅周辺に植えたリンゴの株から生えたものです。

＊「共立百年史」には、安藤治男さんが昭和５年頃の道路事情を綴っているので紹介します。

（略）昭和５年４月１日、入学式に初めて川沿小学校まで４キロメートルあまりを歩いて感じたことは、道路の悪いこと。道路用地があっても馬車が通れれば良い良い方でした。雨でも降ったら途中で足が汚れ、水田の水で足を洗って学校に行ったものです。

（略）春蒔きが終わった６月下旬頃に、部落事業で側溝を掘り、道路の形を造り、冬には馬そりで常呂川から砂利を運搬して入れ、少し道路らしくなりますが、ひと夏で穴だらけになります。毎年夏は２日ほど、冬は１週間ほど共同事業に出たようです。全部無報酬です。こんなことが戦後20年代後半まで続きました。（略）

＊注：昭和６年３月14日　野付牛旭タクシーを野付牛自動車商会が合併し、野付牛自動車株式会社創立。同社と常呂白木自動車部と相互に野付牛・常呂間１日３往復となる（北見毎日新聞）　＊幌型乗用バス運行

＊野付牛自動車株式会社が端野の一部を通過する北見-常呂線（北見・仁頃・豊実・北登・福山・常呂）１日３往復（新端野町史）

＊注：昭和６年11月４日　吹雪のため、築堤工事用架橋の常呂川８号橋落橋

＊注：昭和７年　富丘の石澤義雄が自転車屋を開業（富丘百年史）